

「南部お城めぐり」とは…

近年の「お城ブーム」により、各地のお城には多くの観光客が訪れています。南部氏ゆかりのお城では、急速に進展する調査と研究により、さらなる内容解明がすすめられています。相次ぐ歴史の解明と発見は、地元住民のみならず、全国の歴史ファン・城館ファンの耳目を引いています。

「南部お城めぐり」とは、南北朝期から江戸時代まで、北東北を永く治めた南部氏一族に関連する北東北三県のお城が連携し「御城印」を販売する事業です。「御城印」を通し、広く永い南部の歴史を体感していただくことを目的

「御城印」デザインの由来


1 たねさとしょう 種里城 安藤氏との攻防最前線 津軽藩発祥の地 国史跡

城主：大浦氏（津軽氏） 年代：延徳3年（1491）～江戸時代初期

「種里城」の文字は、昭和7年に建立された種里城址碑（高山松堂揮毫）の文字を元としている。「津軽藩発祥之地」の題字は、昭和51年、始祖光信公450年祭を記念し、津軽家第十四代義孝氏が揮毫し落款したもの。印は、城主光信公の家紋「蔓花菱」と、光信公を始祖と仰ぐ津軽家の家紋「杏葉牡丹」を用いた。

【蔓花菱】
弘前市の長勝寺（津軽家菩提寺）に伝わる光信公木像に付けられており、光信の家紋と推定されている。

【杏葉牡丹】
京都の関白近衛家の縁者（光信から3代目の大浦政信が近衛尚通の猶子）として使用が許された。近衛家の九枚葉に遠慮し、津軽家では七枚葉の牡丹紋を用いたという。




2 なみおかしょう 浪岡城 浪岡御所が継承された北畠氏の末裔の居城 国史跡

城主：北畠氏 年代：1460年代～天正6年（1578）

「浪岡城跡」の部分は、故山内清城氏による書で浪岡城跡案内所の看板に使用されている。御城印の家紋は、村上源氏の代表紋である「笹竜胆」と三春浪岡氏が所有していた陣笠や袴に描かれている笹竜胆紋（竜胆車）を圖案化して用いた。

【竜胆車】
三春浪岡氏は、江戸時代の文献により浪岡北畠氏の末裔である事が確認されている。三春藩の家老職を代々務めていた。ただし、今回圖案化した紋は、現在三春浪岡氏が使用している家紋ではない。




3 くじじょう 久慈城 草木の下に在りては、中世の趣を伝える久慈氏の居城 県史跡

城主：久慈氏 年代：文明年間（1469～1487）～天正20年（1592）

「久慈城」の文字は、市内の書家が揮毫。久慈城が所在する地名として「南部久慈大川目」を表記した。御城印の家紋は、「久慈菱」・「二重菱に五三桐」・「卍」を使用。

【久慈氏の家紋】
久慈氏の直系は「九戸一揆」により滅亡したが、市内の家紋研究者により、今回使用した「久慈菱」・「二重菱に五三桐」・「卍」の3つの家紋が使用されていたと考えられる。

久慈氏は「久慈菱」紋を用いることが多いとされ、古文書には「二重菱に五三桐」・「卍」を用いたとの記載が見られる。




4 もりおかしょう 盛岡城 盛岡藩主南部家の居城 国史跡

城主：盛岡南部家 年代：慶長年間（1596～1615）～明治7年（1874）

「盛岡城」の文字は、江戸幕府老中の盛岡城普請（補修工事）許可証の文字を使用。家紋は盛岡南部家の定紋「双舞鶴」を用いた。

【双舞鶴】
「双舞鶴（そうかくもん）」「向鶴（むかいづる）」などと呼ばれるが、盛岡南部家に伝来した系譜や系図などでは「双舞鶴」と記される。翼を広げた2羽のツルが向かい合った形の紋で、向かって右が口を開いた「あ・うん」の形になっていること、ツルの胸に「九曜紋」が施されることが特徴。『南部系図』によると、13代当主・南部守行の頃、秋田の安藤氏との戦の折に陣中で兵士の士気高揚のための宴を催したところ上空に2羽の鶴が現れ（または陣中に舞い降り）、その後戦に勝利をおさめたことを記念してこれを家紋としたとされる。



5 のへじじょう 野辺地城 津軽領内に接する藩境の城 国史跡

城主：野辺地氏ほか 年代：築城・廃城年代不明（天正20年（1592）には存在）

「野辺地城」の文字は、町内の書家による。御城印の家紋は、南部家の家紋「向鶴紋」を使用した。デザインの家紋は、野辺地の旧南部盛岡藩士・飯田源五衛門の子孫が、大正2年9月8日に野辺地町へ御来遊した旧南部盛岡藩の藩主から下賜された三方と木盃にあしらわれていたものを用いた。飯田源五衛門は、『雑書』にも出てくる鳥撃ち御給人であった。

【野辺地漆とは】
野辺地漆は盛岡藩有数の商港であった。明和二年（1765）、盛岡藩は尾去沢鉦山（秋田県鹿角市）を藩の直営とし、翌年から同港より御用銅を大坂に向け積み出した。野辺地漆には御用銅のほか、藩内の大豆やメダ等の特産品が集まるとともに北前船により各地の品物が集まり、港は発展し、町も交通の要衝として栄えた。




6 しちのへじょう 七戸城 南部氏最北の防衛拠点 国史跡

城主：七戸南部家 年代：14世紀後半～16世紀後半

「七戸城」と「昭和十六年十二月十三日指定」の文字は、昭和18年に建立された史蹟七戸城址碑の文字を元としている。御城印には、町民から寄贈された「長持」に描かれている盛岡南部氏の家紋「向鶴紋」を用いた。

【長持と向鶴紋】
長持は衣装・寝具の収納や、花嫁が嫁入り道具の入れ物として主に近世に使用されたものである。七戸南部家の家紋の詳細は定かたではないが、寄贈された長持が見つかった時期には盛岡南部家の向鶴紋を使用していたと考えられる。

【割菱紋】
甲斐源氏の流れをくむ南部氏が古くから使用していた家紋といわれている。




7 こうすいじじょう 高水寺城 寺院から城館へ、北上川を望む名門斯波氏の居城 町史跡

城主：斯波氏、三戸南部家 年代：建武2年（1335）？～寛文7年（1667）

「高水寺城」の筆文字に、斯波氏の家紋「五七桐」を配置し、城域東部にある「二日町嘉元三年碑（紫波町指定有形文化財）」に刻まれた「キリク（阿弥陀如来：上）」「サ（聖観音菩薩：左）」「サク（勢至菩薩：右）」の阿弥陀三尊の種子をあしらひ、寺院から中世城館への移り変わりを表現している。

【高水寺斯波氏】
鎌倉時代中頃、足利家は斯波郡を所領とし、その子孫が「斯波氏」を称した。斯波は足利一門筆頭の家格とされ、有力な守護大名であった。高水寺城を拠点とした一族は高水寺斯波氏と呼ばれている。250年余りの間、斯波郡を治めたが、天正16年（1588）、斯波詮直が南部信直に敗れ、高水寺斯波氏は滅亡した。その後、高水寺城は、南部氏によって「郡山城」と改められた。




8 なべくらじょう 鍋倉城 仙台藩との藩境に築かれた天然の要害 国史跡

城主：阿曾沼氏、遠野南部家 年代：天正年間（1573～1593）～明治2年（1869）

「遠野南部 鍋倉城」の筆文字に、城主であった遠野南部家の家紋である「向鶴紋」及び「九曜紋」を配置した。台紙左下には鍋倉城の女殿様「清心尼公」のイラストをあしらった。

【清心尼公とは】
近世初頭に遠野（根城）南部家当主を勤めた女性。根城南部家19代当主八戸直栄と三戸南部家26代当主南部信直の娘千代子の間に生まれた。婿を迎え入れた夫の直政と、嗣子久松が没したことを受け、同家の家督を継承した。中世以来の所領である八戸と、後に転封となり移り住んだ遠野を良政したと伝えられる。




9 ねじょう 根城 300年にわたる根城南部家の本拠 国史跡

城主：根城南部氏 年代：建武元年（1334）～寛永4年（1627）

「根城」の題字は、根城南部家第36代南部日實氏の揮毫による史蹟根城跡石碑（昭和18年建立）の文字を使用した。家紋には根城の城主であった根城南部家の家紋「向鶴紋」を使用した。題字以外の文字は市内書家在家溪静による。

【向鶴紋】
南部氏は甲斐源氏の流れをくむ一族で、家紋は割菱や九曜紋を使っていた。室町時代（応永16年）、秋田の安藤氏との戦の際、城主の弟・南部光経は、2羽の鶴が舞い降り、9個の星が降ってくる縁起のいい夢を見た。そこから、胸に9個の星（九曜）を抱いた2羽の鶴を家紋とした「向鶴」を使うようになった。




10 しょうじゅじたて 聖寿寺館 南部氏一族の盟主 三戸南部家の居城 国史跡

城主：三戸南部家 年代：15世紀前半～天文8年（1539）

弘前市在住の書道家・中堂佳音氏の書を、南部町出身のデザイナー・上山保治氏がデザインし、聖寿寺館を築城したと考えられる十三代南部守行公の肖像画背後の旗指物に描かれた南部氏の家紋「向鶴」をあしらっている。

【向鶴紋】
聖寿寺館跡中心区画で確認された当時としては東北最大級の掘立柱建物跡を構成する柱穴からは、向鶴銅製目貫金具（町指定文化財）が出土しており、少なくとも16世紀前半段階では既に南部氏が向鶴紋を用いていたことが明らかとなっている。




11 はなまきじょう 花巻城 伊達を見据えた南部領南端の城 市史跡

城主：北氏、三戸南部家 年代：天正19年（1591）～明治6年（1873）

「花巻城」の文字は、花巻城代・北信愛による『永代安堵之事』の文字を使用。印には、城主南部政直公の菩提寺天巖山宗青寺に納められている位牌にあった南部家の家紋「向鶴紋」を用いた。また、左下には政直公の黒印を押す。

【北信愛とは】
中世段階から三戸南部家に忠誠を尽くした譜代家臣北家の当主。主家三戸南部氏から厚い信任を受け、慶長3年（1598）以降は、花巻城代を務めた。

*題字以外の書：松平志保



12 かねざわじょう 金澤城 金澤柵から金澤城へ 国史跡

城主：金澤右京亮・南部右京亮（三戸南部家の子息） 年代：14世紀後半～元和8年（1622）

「金澤城」の文字は、市内の書家によるもの。御城印の家紋は、金澤城跡二の丸に鎮座する金澤八幡宮で、神社紋として使用されている「笹竜胆」と「五本骨扇に月丸」を用いた。印影は、金澤八幡宮の神社印。

【笹竜胆】
清和源氏の代表的な家紋で、金澤八幡宮では社紋としても使用されている。金澤八幡宮は後三年合戦後に源義家が藤原清衡に命じ、京都の石清水八幡宮を勧請して金澤柵跡地に八幡神を祀った神社と伝えられている。

【五本骨扇に月丸】
佐竹氏の家紋で、佐竹氏の始祖は金澤柵の戦いに参戦した源義光である。関ヶ原合戦後、秋田に転封された佐竹氏が金沢八幡宮を代々々々崇拝した。

